

2023年11月22日

**今冬の雪はどうなる？ウェザーニュース、降雪傾向(12～3月)を発表
エルニーニョ現象による暖冬予想、降雪量は平年より少ない傾向
～太平洋側は低気圧による降水量増、南岸低気圧による大雪のおそれも～**

株式会社ウェザーニュース(本社:千葉市美浜区、代表取締役社長:草開千仁)は、今冬の「降雪傾向」を発表しました。今冬(12～3月)の降雪量は、暖冬の影響で日本海側と東海以西の太平洋側では平年より少ない傾向、北日本太平洋側と関東甲信では平年並の予想です。規模の大きいエルニーニョ現象とインド洋の海面水温分布の影響で、日本付近では偏西風が北に蛇行します。このため、日本付近では南からの暖気が流れ込みやすく冬型の気圧配置が長続きしない傾向です。太平洋側では低気圧の影響を受けやすいため降水量が多くなるものの、気温が高く降雪量としては平年並か少ない予想です。ただ、寒気が入るタイミング次第では南岸低気圧の通過時に東北南部や関東甲信を中心にまとまった降雪となる可能性があるため十分な備えが大切です。

雪のピークは北日本日本海側では1月中旬、東日本と西日本の日本海側で2月前半の予想です。太平洋側では2月前半の予想で、南岸低気圧による大雪に注意が必要です。

最近で今冬と類似しているのは2018～2019年と2019～2020年の冬があります。いずれも全国的に暖冬となり降雪量は少ない傾向でした。最新の見解はお天気アプリ「ウェザーニュース」またはウェザーニュースウェブサイト「長期予報」からご確認いただけます。

※ 平年:気温や降雪量の平年は1991年～2020年の過去30年間の平均

<ポイント>

降雪量:暖冬予想で、日本海側と東海以西の太平洋側では平年より少ない傾向、北日本太平洋側と関東甲信では平年並の予想

ピーク:北日本日本海側では1月中旬、東日本と西日本の日本海側と太平洋側では2月前半の予想

降雪量を左右する要因:エルニーニョ現象とインド洋の海面水温分布の影響で、日本付近で偏西風が北に蛇行し、暖気が流れ込みやすい。冬型の気圧配置が長続きしない傾向

本プレスリリースの素材ダウンロード	最新の予報はこちらから
ウェブ版プレスリリース「降雪傾向」 https://jp.weathernews.com/news/45074/	ウェザーニュースウェブサイト「長期予報」 https://weathernews.jp/s/opinion/

◆ 今冬(12～3月)の降雪傾向

<降雪量とその要因について>

今冬の降雪量は、北日本日本海側で“平年並か少ない”、東日本と西日本の日本海側で“平年より少ない”、北日本太平洋側と関東甲信で“平年並”、東海と西日本太平洋側で“平年並か少ない”予想です。



予想のポイントとなるのは、規模の大きいエルニーニョ現象とインド洋の海面水温分布と大気循環、それに伴う偏西風の蛇行です。

現在、規模の大きいエルニーニョ現象が発生しており、来年(2024年)の春まで続く予想です。また、インド洋熱帯域の海面水温が西部で高く、東部で低い状態が1月頃まで続く予想です。このため、今冬はインド洋東部からフィリピン近海の対流活動が平年より不活発になり(①)、中国内陸の偏西風が平年よりも南を通りやすくなります(②)。この下流にあたる日本付近では、偏西風が平年より北を通るため、南からの暖気が入りやすくなる(③)、寒気が南下しにくくなります(④)。



日本付近の冬型の気圧配置は平年より長続きしない傾向です。このため、北日本日本海側の降雪量は平年並か少ない、東日本と西日本の日本海側では降雪量が平年より少ない予想となっており、特に西日本と東日本の日本海側ではスキー場の雪不足が懸念されます。日本付近に暖気が入りやすくなる影響で低気圧が通過する頻度は平年より多くなります(③)。このため、東日本や西日本の太平洋側を中心に降水量は平年より多くなる予想です。ただ気温が高いため、降雪量としては東海から西日本太平洋側で平年並か少なくなります。北日本太平洋側と関東甲信では平年並の降雪量を見込んでいますが、これは南岸低気圧の通過時にまとまった降雪となる可能性があるためです。最近で今シーズンと類似しているのは2018～2019年と2019～2020年の冬があり、全国的に気温が平年より高く、降雪量は少ない傾向でした。

<雪のピークの時期について>

雪のピークは、北日本日本海側で1月中旬、東日本と西日本の日本海側で2月前半の予想です。これらの時期は一年のうちでもっとも寒く、冬型の気圧配置が現れやすくなるためです。北日本から西日本の太平洋側の雪のピークは2月前半の予想です。寒気の入るタイミング次第では南岸低気圧の通過時に東北南部や関東甲信を中心に大雪になる可能性があるため、事前の備えが大切です。交通機関に大きな影響が出る可能性もあるため、随時最新の情報をご確認ください。

◆ 昨冬(12～3月)の降雪傾向の振り返り

昨冬は全国的に寒気の影響を受けやすい時期と、受けにくい時期が交互に現れました。12月や1月下旬は冬型の気圧配置が強まって寒気の影響を受けやすく、北日本から西日本の日本海側を中心に降雪量が多くなりました。特に12月後半には北日本から西日本の日本海側を中心に大雪となり、太平洋側の一部でも交通機関等に影響が出ました。一方1月中旬や2月前半は暖気が入りやすく冬型の気圧配置が長続きしませんでした。このため、昨冬(12～2月)の降雪量は北日本と東日本日本海側、西日本日本海側で平年並、西日本太平洋側では平年よりかなり多く、東日本太平洋側では平年より少なくなりました。3月は暖かい空気に覆われたため、降雪量は全国的に平年よりも少なくなりました。

◆ エリアごとの降雪傾向

エリア	本格化時期	ピーク時期	降雪量	降雪傾向
北日本	12月上旬	<日本海側> 1月中旬 <太平洋側・オホーツク海側> 2月前半	<日本海側> 平年並か少ない <太平洋側・オホーツク海側> 平年並か多い	<p>北海道では10月21日に旭川、11月10日に稚内、11日に網走、札幌、室蘭、函館、14日に帯広で初雪が観測されました。東北では11月11日に青森、13日に盛岡では雪が観測され、全般に平年より遅い傾向です。</p> <p><日本海側> 今冬の気温は平年よりやや高い～高い予想です。冬型の気圧配置は一時的に強まることはあっても長続きしない傾向で、降雪量は平年並か少ない予想です。ただ、局地的な強雪や大雪のおそれがあるため注意が必要です。3月の気温も平年より高い予想のため、雪どけが早まる所がありそうです。</p> <p><太平洋側・オホーツク海側> 今冬の気温は平年よりやや高い～高い予想です。平年よりも低気圧の影響を受けやすく、2月前半は大雪の可能性あります。3月も平年より高い予想のため、雪どけが早まる所がありそうです。</p>
東日本	1月上旬	2月前半	<日本海側> 平年より少ない <太平洋側> 平年並か少ない	<p>東日本では11月18日に長野で初雪が観測されました。平年日と同日、昨年よりは2週間早い観測となっています。</p> <p><日本海側> 今冬の気温は平年より高い予想です。冬型の気圧配置は一時的に強まることはあっても長続きしない傾向で、降雪量は平年より少ない予想です。ただ、局地的な強雪や大雪のおそれがあるため注意が必要です。3月の気温も平年より高い予想で、雪どけが早まる所がありそうです。</p> <p><太平洋側> 今冬の気温は平年より高い予想です。平年よりも低気圧の影響を受けやすく、降水量が多くなる見込みですが、寒気が弱いため降雪量としては平年並の予想です。ただ、寒気の入るタイミング次第では南岸低気圧の通過時にまとまった降雪となり、2月前半は大雪の可能性もあるため、十分な備えが必要です。3月の気温も平年より高い予想のため、山間部で雪どけが早まる見込みです。</p>

西日本	1月上旬	2月前半	<日本海側> 平年より少ない <太平洋側> 平年並か少ない	<p>西日本では11月18日に福岡、松江、下関で初雪が観測されました。福岡で11月中に初雪が観測されるのは2013年以来10年ぶりで、松江、下関とともに平年日より半月以上早く、昨年より26日早い観測となりました。</p> <p><日本海側> 今冬の気温は平年より高い予想です。冬型の気圧配置は一時的に強まることはあっても長続きしない傾向で、降雪量は平年より少ない予想です。ただ、局地的な強雪や大雪のおそれがあるため注意が必要です。3月の気温も平年より高い予想で、山間部を中心に雪どけが早まる場所がありそうです。</p> <p><太平洋側> 今冬の気温は平年より高い予想です。平年よりも低気圧の影響を受けやすく、降水量が多くなる見込みですが、寒気が弱いこと降雪量としては平年並か少ない予想です。3月の気温も平年より高い予想のため、春の訪れが早まりそうです。</p>
-----	------	------	--	---

◇ 今冬の降雪傾向について

当社では日々、長期気象予測を行っていますが、現在の気象予測の技術水準では予測精度の誤差が大きくなる場合があります。今回の降雪傾向発表にあたり、複数の気象機関や長期予報の有識者からの見通しを元に、総合的に見解を出しています。本リリースにおける情報につきましては、発表日(11月22日)における最新の見解になります。

◇ 気候変動が降雪量に及ぼす影響について

昨今の地球温暖化の影響により、北日本から西日本の日本海側では最深積雪の減少傾向が現れています。また、20cm/日以上降雪日数は北日本日本海側では変化ありませんが、東日本日本海側で減少傾向が現れ、西日本日本海側では減少していることがわかっています。このまま、温暖化が進行した場合、全国的に降雪量、積雪量ともに減少し、特に本州日本海側で大きな減少が予測されています。また、降雪の期間も短くなると予測されています。一方、大雪の頻度は寒冷地の内陸部や山沿いでは多くなる予想となっています。これは、温暖化に伴い気温や海面水温が上昇することで、空気中の水蒸気量が増えることが要因と考えられています。

ウェザーニューズでは、気候変動や地球温暖化によって、私たちの暮らしにどのような変化があるかを分析し、防災・減災の情報発信につなげていく考えです。

※ 参考文献

気候変動監視レポート 2022: https://www.data.jma.go.jp/cpdinfo/monitor/2022/pdf/ccmr2022_all.pdf
 地球温暖化予測情報 第9巻: <https://www.data.jma.go.jp/cpdinfo/GWP/Vol9/pdf/04.pdf>